

# ITB 療法

(髄腔内バクロフェン療法)



WANPUG

子ども達に「**勇気**、**夢**として**笑顔**」を

痙縮<sup>けいしゆく</sup>とは、筋肉に力が入りすぎて動きにくくなったり、勝手に動いてしまったりする状態です。

わずかな刺激で筋肉に異常な力がはいる、



動きにくいだけでなく、不眠や痛みの原因になります。



日常生活動作(ADL)のみならず、

生活の質(QOL)の低下の原因となります。



WANPUG

痙縮の原因としては、脳性麻痺や頭部外傷、無酸素脳症、脳血管障害、脳または脊髄腫瘍<sup>せきずいしゅよう</sup>、脊髄損傷<sup>たはつせいかうかしよう</sup>、多発性硬化症<sup>いでんせいかいせいつまひ</sup>、遺伝性痙性対麻痺などの疾患があります。

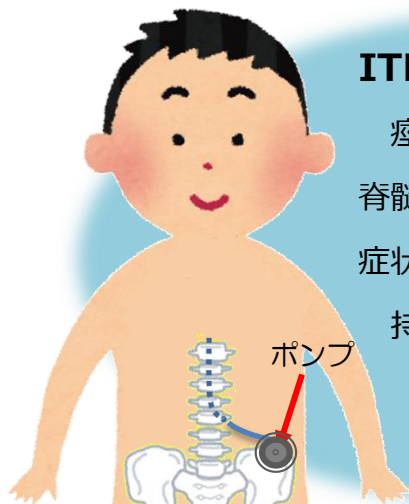
痙縮の治療としてはリハビリテーションのほか、神経ブロックや毒素の局所注射(ボツリヌス療法)、外科治療、などがあります。その中で、脳外科的治療として

ITB 療法(髄腔内バクロフェン療法)があります。

## ITB 療法とは

痙縮に効果のある薬(バクロフェン)を脊髄の周囲(髄腔)に持続投与することで、症状をやわらげる治療法です。

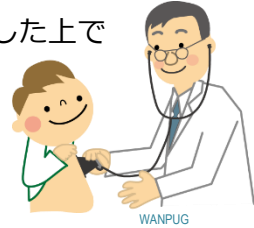
持続投与するために、手術でおなかの皮膚の下に薬剤注入用のポンプを植込みます。



治療を行うには、まず「**トライアル**」と呼ばれる、バクロフェンの効果を一時的に試すことから始めます。



トライアルでは**1～2日間入院**した上で腰からバクロフェンを脊髄周辺に注射し、症状の改善を確認します。



これで効果があると判定された場合のみ、**ポンプの埋め込み手術**を行います。手術直後は効果が強く出過ぎたり、弱すぎたりすることがあるため、薬の量を調節します。

退院後は、症状に応じて流量の調整やポンプ内への薬液補充のために、**1～3か月に1度定期的な外来通院が必要**です。



またポンプは電池で動いており、約7年で電池が切れます。そのため約7年に1回、手術により新しいポンプと交換します。

治療の合併症としては、手術に伴う出血・感染・<sup>ほうごう</sup>縫合不全のほか、カテーテルの位置のずれやまれなもので<sup>りだつ</sup>離脱症状（突然薬の投与が中断されることで起こる高熱や痙縮の増悪などの症状）などもあります。

症状・原因にあわせて手術治療や薬物療法で対処することが必要となります。



地方独立行政法人 大阪府立病院機構

大阪母子医療センター

<脳神経外科>

〒594-1101 大阪府和泉市室堂町 840

患者支援センター TEL 0725-56-1220

FAX 0725-56-5605